

文末詞のモダリティ心理学 Modality psychology of sentence-final particles

伊東昌子
Masako Itoh

常磐大学
Tokiwa University
masakoit@tokiwa.ac.jp

Abstract

This study discussed functions of sentence-final particles in terms of listeners' perception of modality and generation of modality tag on the propositional representation of message sentences based on four psychological researches. On listening sentences with the sentence-final particle "no" listeners generate human relational modality tag such as 'involvement required'. The tag more activates the sentence proposition and showed better memory performance than the case of the same declarative sentences. On listening sentences which finish with "kedo" listeners generate another tag such as 'incomplete message'. The tag maintained the sentence memory longer. These effects show the importance of modality psychology of the sentence-final expression in terms of relation-building communication.

Keywords — Sentence-final particle, Modality tag, Psychological experiment, Effects on memory

1. はじめに

人と人がメッセージ文を投げかけ合う談話場では、メッセージ文の受け手はその文に表現された事柄内容である命題と、文生成時の送り手の主観と心的態度を表すモダリティの双方を理解・感知・推論して応答しようとする。文の構成要素の中で、文末詞（終助詞が代表的である）は文レベルで機能する多様なモダリティを担う主要な言語要素の一つである（宮崎ら, 2002）[1].

談話場、特に対話場面では、命題には反映されない送り手の主観や訴えや誘いかけを文末詞が引き受けて文表現が投棄される。受け手はそのモダリティを感知して命題に重ね合わせながら適応的な応答を生成する。このような機能を果たす文末詞を、藤原（1990）は「会話での、対話のかんどころになる」と述べている（p. 130）[2].

従来、終助詞は国文法における助詞の一つとして、終助詞に至る文がどのように終わるかの観点

から、用法や機能が明らかにされてきた。終わり方への焦点に関連して、終助詞の用法や機能は、主にメッセージ文の送り手の立場から文の終わり方を形づくる形式として説明されてきた。一方、談話場ではメッセージ文を受け取り応答する受け手が存在し、彼らは投棄された文に呼応した文を生成する。受け手の文の生成の仕方に重要な影響を与える部分を終助詞が担うことになる。したがって、終助詞がメッセージ文の受け手にどのような心理学的影響を与えるかを調べることは重要である。

終助詞の受け手に対する独自の機能を解明しようとするとき、藤原（1990）[2]が述べるように、終助詞を「先天性の接続分子として、おのずから半機能者たる（p. 35）」助辞としてではなく、「独自の全的機能がある（p. 35）」文末詞あるいは文結詞として扱うことが適切である。独自の機能を持つ詞として着目することにより、その使用がメッセージ文の受け手に何を感じさせ、どのような印象を持たせ、応答や記憶に与える影響を科学的に研究することができる。対話の連鎖が何によってどう方向づけられて対話がつながるかに関し、メッセージ内容とは別の表現領域としての文末詞が持つ心理学的意味を探究することは、他の文末詞の働きの解明にも貢献できる。

先に述べたように、文末詞としての終助詞が談話場におけるメッセージ文のモダリティを担う。特に即応性が求められる対話場面では、聞き手（メッセージ文の受け手）は話し手（送り手）の主観状態を感知した上で応答する必要がある。聞き手が終助詞によって応答のための重要な手がかりを感知し、適切な即応的応答を生成するときの、ま

さに「かんどころ」をつかむ心理過程の解明が求められる。以下では終助詞を文末詞として、文末詞とモダリティの関係を議論する。

2. メッセージ文のモダリティタグ

藤原（1990）は、談話活動は文末詞的なものをくさびにして個々の文を順置していく作業であり、個々の文が次々に仕立てられていくと言う（p. 130）[2]。この状況的に「仕立てる」活動が可能になるためには、メッセージ文の受け手の内部には投げかけられた文の命題とモダリティに対応する表象が生成されねばならないであろう。

分かりやすさのために、対話場面を想定して議論を進める。メッセージ文には話し手が捉える「出来事」^{†1}である命題と、命題に対する心情や聞き手に対する働きかけを示すモダリティが含まれる^{†2}。聞き手に対する働きかけを山本（2004）は対人的モダリティと呼ぶ[3]。例えば「月が青いよ」は、話し手が聞き手に一緒に見るように誘う心情、あるいは聞き手が対象に注目するよう望む心情が暗示される。一方「月が青いね」であれば、青さを共感したいのだろうとの心情が知覚される。この知覚に対応する対人的タグ（human relational tag）、例えば“誘い”タグ、“要注目”タグ、“要共感”タグが聞き手内部に生成されて、命題表象に貼付されると推察される。

別の例を考えてみよう。「これが欲しいと思うけど」と投げかけられた場合、聞き手内部には未だ語られない部分があることを示す表象（空白ノードのようなもの）が生成され、そこに注意が向けられて待機状態になるであろう^{†3}。話し手が続く部分を語らないときは、未完成部分の表象に“未完”タグが貼付され、未完であるが故に注意は解除され難い。このため、聞き手が未完部分を埋めようとして「けど、何なの↑」と問いかけるかも知れない。このように対人的モダリティは、その種類や機能に応じて、命題表象の生成の有り様や相互行為の取り方の手がかりを聞き手に与える。

相互行為の取り方については、筆者が文末表現によって話し手が状況的に抱く対人的距離感を察

知した例をあげよう。以前、私は年下の同僚と電車の中で一緒になり、仕事を離れてたわいもない会話を楽しんでいた。そのような場でも彼女は丁寧語で話していたが、仕事で生じたトラブルについて密やかな口調で話すとき、「おおっぴらにはいえない話なんだけどさ…」と仲間に話すような文末表現を使い始めた。とっさに私は「なに、どうしたのさ」と同様の文末表現で返した。先輩後輩という社会的距離を保った表現から親密さを示す表現への変化は、彼女の内部で私が先輩から秘密を共有する仲間へと変化したことを指標する。私は一瞬違和感をもったが、すぐに仲間的な距離感で会話を続けた。このように話し手と聞き手の関係性は、文脈や状況により話し手の中で刻々と変化する。それが文末詞に反映されて、聞き手は変化を知覚することができる。

モダリティタグの生成は、おそらく命題の意味処理と並行して素早くなされると推察される。そのような命題表象とモダリティタグの双方が、即応的で「かんどころ」を捉えた力動的かつ繊細な会話の局所的連鎖を可能にすると考えられる。

ここから先の検討は、対人的タグにどのような種類と事例が認められるかを分析整理する方向と、それらのタグの心理学的な影響、聞き手の何にどう影響を与えるかを検証する方向が考えられよう。ここでは後者に焦点をあてて議論を進める。

3. 対人的モダリティの知覚

伊東・永田（2007）は、対話場面でよく使用される文末詞である「ね」や「よ」に比べて使用頻度が低く、あまり注目されてこなかった「の」に着目し、その使用がどのような意図の知覚を引き起こすかを調べた[4]。対象となった文末詞「の」の用法は、下降調のイントネーションで使用され、語調をやわらげつつ聞き手を意識した主観的断定を表すもの（大辞林第二版, 2006）である[5]。

話し手の意図に関連して、山森（1997）は対話の局所的連鎖の観点から「ね」と「よ」の説明を行っている[6]。文末詞「ね」は、話し手が認識していた先行状況の変更を示唆せずに以降もその

先行状況が保たれることを暗示する (①). 一方, 文末詞「よ」は現行発話が先行状況と非整合的であるとの話し手の認識を示し, 会話文脈を新たな局面へと展開させる (②).

いつものように正確な作業ですね. ①

あの一, 財布が落ちましたよ. ②

私は赤い色にするの. ③

「ね」や「よ」と異なり, 「の」は現行発話が先行状況を引き継いでいるか, 新たな局面へと展開させようとするかを曖昧にしたまま文を投棄し終了させる. 例に示した③の「の」は, 「ね」でも「よ」でも交換可能であり, 「の」のままでは話し手内部での先行状況との関係が曖昧である (伊東・永田, 2007) [4]. したがって, 対話場面で話し手と共同注意体勢にある聞き手 (近藤, 2006[7]; 宇野・池上, 2005[8]) は, 投棄された曖昧な主観に注意を向けざるを得ず, 関与せざるを得ない状態に陥る. 自然な局所的連鎖は投機的行為を支える行為 (grounding) によって成り立つからである (岡田, 2001) [9]. このような場合には, 対人的“要関与”タグが生成されると考えられる.

伊東・永田 (2007) は大学生を対象として女子大学生の日記風の文章を読んでもらい, 書き手のどのような意図が知覚されるかを調べた[4]. 刺激としては, 文章を構成する文が宣言文条件と文末詞「の」付加文条件を設けた. その結果, 「の」付加文では, 読み手の性別に関わらず, 「聞いてほしい」「共感してほしい」「関わりを持ちたい」「読み手の何らかの反応を期待している」との意図が知覚された. また, 読み手としての反応を調べた実験では, 「の」付加文条件においては, 男子が聞く姿勢になりやすいことが示された. この結果は,

「の」付加文の処理において, “要関与”タグが生成されることを支持するものである. 生成されるタグの種類やその活性化の程度が, メッセージ文の受け手の性差により異なることも示唆される^{†4}.

なお, 上記研究において刺激として使用した文章に関して, 今日ではソーシャル・ネットワーク・サービスが普及しているため, 日記であれ, それはネットワーク上の対話のきっかけになり得る.

被験者の大学生にとっては, 文章刺激に文末詞が付加されている場合でも, あまり違和感がなかったことを述べておきたい.

心理学実験により, 聞き手 (読み手あるいは受け手) が対人的モダリティに敏感に反応し, 適切なタグが生成されることが示唆された. それらのタグは即応的反応それ自体に影響を与えるだけではなく, 図1に示すように, 関わり感や聞く姿勢といった注意の向け方やその強さにも影響を与え, 結果として命題表象の活性化水準や記憶にも影響をもたらすと推察される. また, 文末詞の使用は待遇表現でもあるので, 聞き手の感情にも影響を与えると推察される.

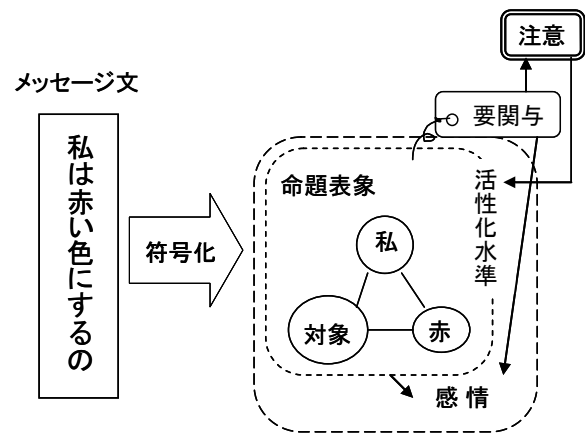


図1 メッセージ文の処理と表象のモデル

以下では, “要関与”タグを生成させるであろう文末詞「の」を例として, その使用が記憶に与える影響を調べた心理学実験を整理し, モダリティタグの生成とメッセージ文の認知的処理の関係を検討する.

4. 命題表象の活性化と記憶への影響

4-1 “要関与”タグ: 文章の記憶と理解

伊東・永田 (2007) の実験1において, 上述の宣言文文章と文末詞「の」付加文文章を材料として2つの刺激条件を設け, 刺激文の読了後に記憶テストと理解度テストを行った[4]^{†5}. 文末詞「の」付加文文章条件では, “要関与”タグが生成されて命題表象への注意がより多く注がれ活性化水準が上がるので, 宣言文文章条件よりも記憶が促進さ

れるであろう。一方、当該タグは命題の意味操作や推論操作には影響がないので、真偽を問う理解テストでは差がないと予測される。

記憶テストは、特定語句に対し「そのままの表現があった」「ちょっと違うがそのような表現があった」「そのような表現はなかった」を答える 12 問から成る。理解テストは、短文に対し「文章内容からそう推測できる」「文章内容からは判断できない」「文章内容とは異なる」を答える 10 問から成る。結果として、記憶成績は文末詞「の」付加文条件と宣言文条件で、それぞれ 8.25 と 7.42 であり、 t 検定の結果 6% 水準で文末詞付加文条件の方が成績が良い傾向が認められた。理解成績はそれぞれ 6.32 と 6.39 となり、両群の差は認められなかった。この結果は予測を支持するものである。

4-2 “要関与” タグ：短文リストの記憶

文章刺激は対話場面で行き交うメッセージ文とは異なる。対話場面では、文末形態の異なるメッセージ文が複数投げかけられる。このことを考慮し、宣言文と文末詞付加文が混在する複数の刺激材料を用いて、文末表現の違いが記憶に与える影響を調べた研究がある。伊東（2010）は、大学生を対象に、宣言文と文末詞「の」付加文が混在した文リストを刺激材料として、文末詞文の記憶が促進されるかどうかを調べた[10]。“要関与”タグは文末詞「の」が付加された文の表象にのみ貼付されるので、使用された文の記憶を促進すると考えられる。

刺激材料としては、「色を選びたい」「海を渡りたい」「店を開きたい」などの「～を～したい」という単文 20 個が用意され、半数に文末詞「の」が付加され、残り半数は宣言文であった。刺激用紙 1 枚に 1 文を印刷したものを、提示時間が 3 秒、刺激間隔は 2 秒として、任意の順で順次読み上げて提示された。刺激文内容と文末形態の組み合わせも複数種類作成された。20 個の文は、一人の女子学生の雑多な願望を記したものであるという設定である。記憶テストとしては、直後再生と 1 週間後の遅延再生が実施された。結果として、直後再生では文末詞「の」付加文の平均再生率は、

宣言文より有意に高かった（それぞれ.47 と.34）。遅延再生ではどちらの群の成績も同様に低下したため、文末詞「の」付加文の成績の方が宣言文より高いままであった（それぞれ.25 と.14）。文末詞はそれが付加された文の命題表象をより活性化することがわかる^{†6}。

上述の結果は、文末詞「の」に関する従来の文法的説明からは予測できない。従来は文末詞「の」は語調を和らげつつ主観的な断定を表すと説明され、主張の強さは宣言文より弱いことになる。この場合、文の命題表象の活性化レベルは弱く、記憶を強める効果はないと予測される。しかし、文末詞「の」付加文の平均再生率は宣言文のそれより有意に高かった。生成された“要関与”タグの効果であると推察される。

以上のように、対人的モダリティタグはその種類に応じて文の命題表象の活性化に影響を与え、記憶にも影響を与える。上述の実験の結果は、文末詞「の」の働きというよりは、“要関与”タグの働きと考えられ、他の文末表現であっても同様のモダリティを指標するものであれば同様の効果が認められるであろう。文の命題表象の活性化水準だけではなく、文末詞が表象内容の有り様に影響を与えることを示唆した研究がある。文末詞「けど」を使用した研究である。

4-3 “未完” タグ：短文リストの記憶

文末詞の「けれども（けれど）（けど）」は、言いさしの文に付けて、ためらったり相手の反応を待ったりする表現であり、また前に述べた事柄から続くと考えられる以外の事柄が後に続く意を表す（大辞林第二版、2006）[5]。この文末詞が使用されると、聞き手内部の命題表象には未だ語られていない未完部分の枠が生成されると考えられ、そこには“未完”タグが貼付される。しかし文が終了してしまうときは、聞き手内部では未完の枠が埋められることなく待ち受け状態のまま終了する。このような場合、命題表象や記憶にどのような影響があるだろうか。

宣言文④と「けれども」付加文⑤における命題表象の活性化水準を検討する。「けれども」付加文

では、聞き手はまだ述べられていない部分に注意
店を開きたい。 ④

店を開きたいけれども。 ⑤

を移行させるので、「店を開きたい」部分の活性化水準は宣言文の方が強いと考えられる。一方、「けれども」付加文では“未完”タグが貼付された未完部分への注意が解除されないまま文が終了する。このため「けれども」付加文では「店を開きたい」部分の活性化水準は宣言文に比べて低くなるものの、未完状態という緊張が持続することの影響が認められるであろう。

伊東（2010b）は宣言文と「けど」文末詞付加文が混在する刺激材料を用いて、文末表現の違いによる記憶への影響を、直後再生と一週間後の遅延再生により調べた[11]。「けど」を用いた理由は、宣言文と比べて字数の差を最小にするためである。予測としては、直後再生では文の命題表象の活性化水準が相対的に高い宣言文の方が成績が良い。ただし記憶された「けど」付加文は記憶減衰への抵抗がより持続すると考えられる。

実験の刺激材料は、伊東（2010a）で用いた「～を一したい」という単文 20 個である。その半数に文末詞「けど」を使用し、残り半数は宣言文のまま終了させた。刺激用紙 1 枚に 1 文を印刷したものを提示時間は 3 秒、刺激間隔は 4 秒として順次読み上げて提示した。設定は同じである。直後再生と 1 週間後の遅延再生を行った。結果として、直後再生では宣言文の成績の方が良い傾向が 7% 水準で認められた（「けど」付加文と宣言文の平均再生率は、それぞれ.31 と.41）。遅延再生では、それぞれ.15 と.19 となり、有意差は認められなかった。記憶低下率に関しては、それぞれ.16 と.22 であり、「けど」付加文の方が、記憶低下が少ない傾向が 8% 水準で認められた^{†7}。

文末詞「けど」は聞き手の注意をその後の未完部分に移行させ、その内容が与えられない場合は、緊張が解除され難いことが示唆される。“未完”タグが貼付された出来事が忘れられ難い現象は、ツァイガルニク効果（Zeigarnik, 1967）と呼ばれる[12]。本来のツァイガルニク効果は、課題遂行者が実施中の課題を中断させられたときに、完了した課題

よりも中断させられた課題をより良く思い出す現象である。対話場面でのメッセージ文のやり取りにおいて、聞き手は話し手の文の投機を支える行為を返そうとする[9]。そのとき、未完の部分がありそれが語られないならば、聞き手が用意した命題表象の枠もそこへの注意も解除されず中断される。この内的状態が記憶の減衰に抵抗を示したのであろう。

5. 文末詞の働き

本稿では、終助詞や他の文末に用いられる表現を含む文末詞が対話場面における聞き手や SNS 上の読み手に与える影響を、文生成時の話し手（書き手）の表現態度を表す対人的モダリティの働きの観点から検討した。以下、文末詞が命題表象の形成や活性化に与える影響について議論を行なう。

5-1 表象形成への影響

メッセージ文の表象に関しては、文が示す出来事の命題表象にモダリティタグが貼付されることを提案した。例えば、下降調イントネーションで語調をやわらげた文末詞「の」の場合は、“要関与”タグが生成され貼付される。文末詞「けど」の場合は、“未完”タグが生成され貼付される。また「けど」が出現した時点で、命題表象としては続く内容部分が用意され、それが埋められることを待つ。このため、未だ検証はされていないが、聞き手の応答開始は他の断定を示す文末詞が使用された場合より遅くなることが予想される。

本稿で検討した「の」や「けど」に限らず、聞き手（読み手）は文末詞を手がかりにして話し手（書き手）の表現態度に関わる主観を知覚し、「出来事」以外の表象をも生成したり、知覚された対人的モダリティタグが貼付されたりする。それらを手がかりに応答が生成されるので、応答内容だけではなく、応答タイミングにとっても、文末詞は「かんどころ」になる。

5-2 表象の活性化：記憶への影響

文末詞「の」は話し手の主張としては強くない。しかし聞き手の関与を誘^{いざな}う“要関与”タグ

を生成させ、これが文の命題表象の活性化水準を強める。この内部現象は関係構築を主目的とするコミュニケーションにおいて重要な側面である。宇野・池上（2002）が述べるように[8]、日常の言語伝達の解釈は話し手と聞き手の相互行為性に依存しており、間主観的な場に投棄された言葉の働きは、聞き手内部で独自に生成されることがある。その内部変化を捉えることにより、言語要素の隠された働きや意味が現れる。本稿で示したように、文末詞「の」は聞き手に話し手の主観への関与依頼知覚を生じさせ、命題の活性化水準にも影響を与える。

文末詞「けど」の場合は、聞き手内部では単に文が言いさしで終わったとの理解ではなく、心的注意が「けど」の後に注がれるとともに、未完部分の枠が生成される。その枠が埋められない場合は、“未完”タグが貼付され、それ故に注意が解除されず、日数を経ても記憶に残る部分があることになる。この状態は、時を越えて話が再開される契機を提供すると思われる（例、「そういえば、この間の「けど」は何が言いたかったか聞いてもいい↑」）。

5-3 感情への影響

先述の図1ではモダリティタグが感情にも影響を与えることを示している。これは文末詞の使用が待遇表現であり、状況によっては親しみ感を与えることもあれば、ぎゃくに違和感や不快感を与えることもあると考えられるからである。言語学的にはポライトネス理論に基づく議論が可能であろうか、心理学実験では未だ明らかにされていない。おそらく印象形成に影響を与えると推察される。

6. 今後の課題

文章理解研究は、文章の表象について、文意を表すテキストベースと対象世界の出来事や状態の様子を表す状況モデルの2種類があることを明らかにした（van Dijk & Kintsch, 1983）[13]。本研究では、表現対象の表象であるテキストベースと状況モデルの他に、内部で生成されるであろうメッセージ文の送り手の主観や対人的態度を指標するモダリティに着目した。そのモダ

リティを担う文末詞の使用が受け手に相応のモダリティタグを生成させると仮定し、それが対話意図の知覚や文内容の記憶に与える影響を心理学実験を整理することにより検討した。

本研究では限られた終助詞や他の文末表現についての実験を扱ったが、他の文末表現についてもより広くモダリティの観点から検討することが可能である。文末表現の働きを検討するとき、本研究の特徴であるメッセージ文の受け手への影響を明らかにすることは重要である。従来の言語要素や表現要素の研究は、主に送り手の立場から、あるいは適切な用法の観点から知見が積み重ねられてきた。この背景には伝達を目的とするコミュニケーション像が影響していたように思われる。しかし関係構築を目的としたコミュニケーション像を描くことにより、言語要素の新たな意味や働きが発見されると期待できる。

関係構築を目的とするコミュニケーションにおいて、文末表現がメッセージ文の送り手のモダリティを担うならば、他言語においても同様の言語要素が認められるはずである。今後は他言語における文末詞のあり方や、モダリティの表現方法を検討する必要がある。

文末詞が担うモダリティやそのタグが他の内的状態に与える影響については、様々な応用分野が考えられる。例えば、現在の人工知能を備えたロボットがメッセージ文の聞き手である場合、文末詞は無視して意味処理を行うか、あるいは文末詞の文法的説明を検索する処理を行なうであろう。しかし、より自然な聞き手反応を引き出すためには、モダリティ内容やタグが注意あるいは感情に与える影響を再現させる必要がある。さらに、モダリティ知覚は脳のどの部位でどのタイミングで行われるのか。その部位の活動は記憶を司る部位とどう関係するのか。感情を司る部位との関連はどうであろうか。これらの問いには、領域を超えた研究で答えねばならない。

対話場面でのメッセージ文に出現する文末詞のモダリティを的確に知覚する力は、社会的なコミュニケーションに欠かせない。豊かで力動

的かつ繊細な対話の「かんどころ」の解明に、文末詞が聞き手に与える影響を明らかにする研究は、他領域への広がり期待でき、独自の発展的研究領域を提供するであろう。

また、最近ではメール上でのコミュニケーションのように、メッセージ文の最後に絵文字表現を行う場合が散見される。文末が新たな表現領域として拡張されているようにも考えられる。メッセージ文の文末表現とその読み手への影響が、さらに着目され解明されることを待ちたい。

注)

†1 山本 (2004) [3]と庵 (2001) [14]は「出来事」を文の概念的内容という意味で用いており、『一郎が殴った』のような『動作』、『事件が起こった』のような『(狭義)の出来事』、『静かな夜だ』といった『状態』のすべてを含むものとしている。

†2 秋月 (2005) [15]は、命題に関わるモダリティに関して、判断や説明を指標する対命題モダリティの他に、背景文脈から話し手が嬉しい状態にあるか悲しい状態にあるかといった心情を担う発話状況モダリティがあるとする。しかし、ここでは対人的モダリティに焦点があるため、命題に関わるモダリティについての詳しい議論は行なわない。

†3 本稿における文末詞には「けど」のように文末に用いられる表現も含む。

†4 “要関与”の“関与”については、実験で得た「聞いてほしい、共感してほしい、関わりを持ちたい、何らかの反応を期待する」との知覚に基づき、話し手の主観に注目し参加する意味で用いている。このような機能は、文末詞「の」が命令として機能する用法があることの説明にもなる。

†5 伊東・永田 (2007) では対人的モダリティの知覚を問題としているため、第1実験では印象評定のための記載がある。実際は印象評定の前に、記憶と理解のテストを行っている。

†6 談話の流れの中に埋め込まれたメッセージ文の記憶を想定しているので、系列位置曲線に認められる初頭効果と新近性効果の影響のない範囲を分析対象とした。具体的には、系列位置

曲線の底辺部に相当する項目を先行研究から特定し、6番目から13番目を分析対象とした。

†7 26名であった被験者数を増やそうとした時期、データを保存したメモリが破損した。このため新たな48名を対象として実験をやり直した。直後の平均再生率は「けど」付加文と宣言文では.36と.44となり9%水準で差の傾向があった。遅延再生では.23と.23と差はなかった。記憶低下率は.13と.22となり6%水準で差の傾向が認められた。このように同様の結果を得た。

参考文献

- [1] 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃, (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』, 東京: くろしお出版
- [2] 藤原与一, (1990) 『文末詞の言語』, 東京: 三弥井書店
- [3] 山本裕子, (2004) “発話を形成する要素についての一考察”, 名古屋大学紀要, 50 (人・社), pp. 153-166.
- [4] 伊東昌子・永田良太, (2007) “談話場における相互行為の構築に関わる文末詞の修辞機能”, 認知科学, Vol. 14, No. 3, pp. 282-291.
- [5] 大辞林第二版, (2006) 東京: 三省堂
- [6] 山森良枝, (1997) “終助詞の局所的情報処理機能”, 谷泰 (編) 『コミュニケーションの自然誌』, pp. 62-67, 東京: 新曜社
- [7] 近藤安月子, (2006) “「のだ」が指標する話し手の主観性”, 月刊言語, Vol. 35, No. 5, pp. 68-73.
- [8] 宇野良子・池上高志, (2005) “ジョイントアテンション: 予測と言語志向性を揃えるメカニズム”, 山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎 (編) 『認知科学論考 No.2』, pp. 231-274, 東京: ひつじ書房
- [9] 岡田美智男, (2001) “社会的な相互行為とそのリアリティを支えるもの”, 岡田美智男・三嶋博之・佐々木正人 (編) 『身体性とコンピュータ』, pp. 220-232, 東京: 共立出版
- [10] 伊東昌子, (2010a) “文末詞「の」が記憶に与える影響: 相互行為の観点から”, 認知科学, Vol. 17, No. 2, pp. 287-296.

- [11] 伊東昌子, (2010b) “共同関与を誘う文末詞「の」”, 日本認知科学会第 27 回大会論文集, 神戸大学, 9 月 17 日, 索引 P1-18.
- [12] Zeigarnik, B. (1967) “On finished and unfinished tasks.”, In W. D. Ellis(Ed.), *A source book of Gestalt psychology*. New York: Humanities Press.
- [13] van Dijk, T.A. & Kintsch, W. (1983). *Strategies of discourse comprehension*. San Diego, CA: Academic Press.
- [14] 庵功雄, (2001) 『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- [15] 秋月高太郎, (2005) “ケータイメールの日本語”, *Mobile Society Review 未来心理*, Vol. 3, pp. 20-25.